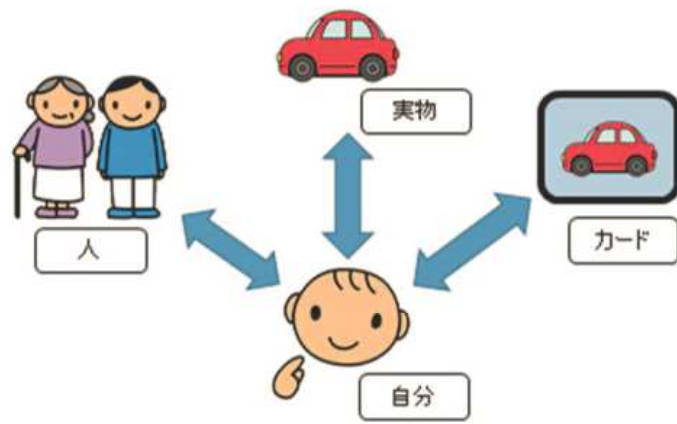


二項関係の気づき



視覚支援を用いたコミュニケーションアプローチを用いて、土台となる共同注意から導入しました。二項関係から三項関係へと理解が進み、自発的なコミュニケーション手段が芽生えたことで、人への関心が引き出され、集団生活での過ごし方に変化がみられました。

三項関係へ発展



■ 保護者の変化

個別療育には保護者も参加しました。実際に子どもとのやりとりに加わりながら、毎日家庭で取り組むことで、保護者にも変化がありました。

2事例に共通した保護者の発言

自分でいろいろな方法を試していた時は、何の成果も手ごたえもなかったので、子どもが学べないと諦めていた。

子どもの力に気づけた。自分でもっと子どもの情報を知り、学べることを信じて関わろうと思った。伝え方を教えてもらって、子ども自身が楽になったと思う。

このような望ましい結果につながった背景を、3つのポイントにまとめます。

考察

重度精神遅滞児のコミュニケーションアプローチに必要な3つのポイント

- スキルを焦点化し、個別に学ぶ環境を設定する
- 保育とSTが連携する
- 子どもの解説を受けながら保護者が参加する

今回の成果を、子ども、保護者、療育スタッフの3つの側面からまとめます。

今回の成果

子ども：
◎ **自発的なコミュニケーションスキル**を身に付けたことにより、他者意識が広がった。

保護者：
◎ 子どもの見方に広がりが出た。
◎ 親子ともに**コミュニケーションマインド**が引き出され、人との関係の中で学ぶ良い循環が形成された。

ST・担任：
◎ 集団と個別場面の両方を、丁寧に把握できた。日々の**生活で積み重ねて実践**できた。

■ 実用的なスキルの習得のために

個別療育だけでなく、毎日の家庭や通園で場面を決めて実施していくことで、実用的なスキルを習得できました。保護者が「自分ができることがあり、それによって子どもが変化する」と体験的に実感できたことも、重要でした。

まとめ

- コミュニケーション支援を個別な環境から開始した。
- 通園での集団生活(担任)、家庭生活(保護者)とも連携した結果、**実用的なスキルの習得**ができた。

- 今後も、連携を基本としたコミュニケーション支援を行い、子どもにとって有益かつ適切なスキルの習得を目指したい。

